

キャリア教育の評価に悩むのは誰か

What Is The Matter of Evaluation of Career Education?: A Note on Problems of Evaluation Which Teachers Face in Junior and Senior High Schools of Japan

立石 慎治*
TATEISHI Shinji

Abstract

The aim of this paper is to clarify what factor related to problems teachers face on evaluation and assessment of career education through analysis of specific data sets from the Comprehensive Survey on Career Education, Guidance and Counseling including responses from 950 junior high school teachers and 1,978 senior high school teachers all over Japan.

In the analysis, we overviewed the relation between a problem on worries on evaluation of career education and other 44 variables from 3 areas: 1) opportunities of professional development, 2) documents about students' backgrounds, and 3) the present state of career education.

The result of cross tabulation and exact test analysis shows that it is difficult for teachers to evaluate their own career education practices when the school has no overall plan on career education.

In conclusion, we confirm that it is important to have a plan for career education, and we need to reinvent how to deliver the information to teachers who are facing evaluation problems.

1. 課題の設定

本稿の目的は、どのような状況に置かれている教師が「キャリア教育の評価に悩んでいる」のかをキャリア教育に関する実態調査のデータを通して明らかにし、手当を考える上での示唆を得ることである。

キャリア教育の推進・充実が言われて久しい。1999年にキャリア教育の語が中教審答申に登場してから15年がたった。『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』が公刊され、俗に「キャリア教育元年」と呼ばれた2004年からも既に10年がたっている。各地で取り組まれてきた実践については、政府によるグッドプラクティスの表彰や都道府県・政令指定都市における取組事例¹⁾の紹介、雑誌による事例紹介なども多く行われ、自校で、あるいは自地域で取組を行う際に参考となる情報を手に入れやすい環境が整ってきている。

内容や手法については様々な取組が見られるようになった一方で、あるいは様々な取組がなされるようになったからこそかもしれないが、それらの取組の状況を把握することや、取組が児童生徒にとってどれほど効果があったのかを把握することについても関心を引くようになってきている。つまり、キャリア教育の評価が課題となっている。川崎が2008年の時点で既に指摘しているように、「(引用者注: キャリア教育の) 結果としてどのような教育効果が得られたのか、それが問われる時

* 生徒指導・進路指導研究センター 研究員

期を迎えている。しかし、学力の場合と異なり、何を指標としてどのように効果を測ればよいのか、学校現場では戸惑いが生じている」（川崎 2008）。全国的な調査にも評価への悩みは現れており、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2013: 153）によると、中学校担任教員にとって評価は、学級で進めるキャリア教育に関する悩みとして、17 項目中 2 番目（34.9%）に多く選ばれるものになっている。同じく、高等学校ホームルーム担任教員についても、評価は 17 項目中で上から 2 番目（31.0%）に多い悩みとなっている（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 2013: 262）。

決して、キャリア教育の評価が研究上で関心を引いてこなかったわけではない。CiNii²⁾にて「キャリア教育 評価」で検索すると、1999 年から 2014 年の間に発行されたものとして、109 件の論文や図書・雑誌³⁾がヒットする。これは飽くまで「キャリア教育」と「評価」で検索したかぎりであって、キャリア教育の効果測定の流れで用いられてきた、自己効力感や進路成熟度、職業興味といった領域の研究（川崎 2008）を足せば、その数は更に増える。自己効力感といった伝統的な指標にとどまらず、情動に着目する提案（内浦・毛受 2008）もなされており、新しい動きもみえている。

もちろん、研究上のみで関心を引いているわけではなく、評価に関する情報提供もなされてきている。たとえば、『中学校キャリア教育の手引き』（文部科学省 2011a: 107-111）、『高等学校キャリア教育の手引き』（文部科学省 2011b: 119-123）には「キャリア教育の評価」についての解説にページが割かれている。また、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターが発行するキャリア教育支援資料では、PDCA サイクルの解説のなかで評価が取り上げられてもいる（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 2011）。

このように、評価を行う上での手掛かりは決してないわけではない。ではなぜ「戸惑いが生じるのだろうか」。

本稿の目的は、中学校及び高等学校の教師を対象とし、どのような状況に置かれている教師が「キャリア教育の評価に悩んでいる」のかをキャリア教育に関する実態調査のデータを用いて探索的に分析し、その結果から手当を考える上での示唆を得ることを目的とする。

2. 分析の手法

(1) 使用するデータ

分析に使用するのには、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターが行った「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」のうち、中学校の学級担任を対象したアンケート（以下、中学校担任調査）、及び、高等学校のホームルーム担任教員を対象としたアンケート（以下、高等学校担任調査）で得られた回答データである。各回答の分布等の詳細については国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2013）に掲載されているとおりなので、本稿では単純集計結果は割愛する。

調査は、平成 24 年 10 月上旬から 11 月中旬の期間で行われた。各都道府県、政令指定都市教育委員会が所管する公立高等学校を母集団とし、中学校では 500 校、高等学校では全国で 1,000 校をサンプルとして得られるよう都道府県、政令指定都市ごとに学校数を配分し、その数に従って対象校を抽出した。このように選ばれた学校の中で、第 3 学年のホームルーム担任教員全員の中から無作為に選ばれた 2 名が今回の調査協力者である。なお、協力を得た学校において第 3 学年が 1 クラスの場合は、1 名の回答を求めている。

配布数・回収数・回収率については、表1のとおり。

表1 各調査の配布数・回収数・回収率

	配布数 ⁴⁾	回収数	回収率
中学校担任調査	(1,000人)	950人	95.0%
高等学校担任調査	(2,000人)	1,978人	98.9%

(2) 分析の手法

中学校担任調査データ、高等学校担任調査データの設問「困ったり悩んだりしていること_キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない」（中学校担任調査問7、高等学校担任調査問8）に着目し、これと関連する変数を探索的に検討する。なお、「キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない」との悩みは、中学校担任、高等学校担任のいずれも17項目を尋ねたうちの第2位（中学校34.9%、高等学校31.0%、複数回答可）に挙げられている。

両調査において設問は大きく幾つかの領域に分かれているが、本稿では、「支援・能力開発」に関する変数、「キャリア教育の計画・実施」に関する変数、「利用している個人情報」に関する変数を取り上げる。

「支援・能力開発」に関する変数には、読んだことがある資料や、受けたことがある研修が該当する。これらが関連するならば、資料を読んだ経験がない方が、また研修を受けた経験がない方が、評価に悩むと回答する割合は多いはずである。

「キャリア教育の計画・実施」に関する変数は、文字どおり、キャリア教育の計画や、計画に基づく実施について尋ねたものである。これらが関連するならば、計画を立てていなかったり、計画に基づいて実施していなかったりする方が、評価に悩むと回答する割合は多いはずである。

「利用している個人情報」に関する変数では、キャリア教育を実施する際に利用している、生徒理解のための個人資料を尋ねている。生徒理解は評価の一側面でもあるので、個人資料を利用していない方が、評価に悩むと回答する割合は多いはずである。

表2 分析に使用する変数について

	中学校担任調査	高等学校担任調査
支援・能力開発 18項目	問1(2) 読んだことがあるもの 問1(3) 参加した校内研修会	問2(2) 読んだことがあるもの 問2(3) 参加した校内研修会
キャリア教育の計画・実施 16項目	問3 キャリア教育の計画・実施の現状	問4 キャリア教育の計画・実施の現状
利用している個人情報 10項目	問6 あなたの学級でキャリア教育を行う際、どのような「生徒理解のための個人情報」を利用していますか	問7 あなたのホームルームでキャリア教育を行う際、どのような「生徒理解のための個人情報」を利用していますか
悩み	問7 困ったり悩んだりしていること_キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない	問8 困ったり悩んだりしていること_キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない

以上の予測のもと、3領域計44の変数⁵⁾と、先述の、評価に関する悩みの変数との連関を検討し、解釈を次章で示す。すべての変数に関して、評価に関する悩みの変数とのクロス表を作成し、独立性の検定(両側)を行った⁶⁾。ただし、変数の双方が2値を取るものになった場合は、代わりに正確確率検定(両側)を行っている。また、変数のいずれかが2値ではなかった場合でも、期待度数が5を下回るセルが全体のセルの2割を超えるか、期待度数が1を下回るセルがある時には、正確確率検定を行った。なお、大量の変数を扱ったため、次章で図示するのは、p値が0.05を下回ったものに絞っていることを予め述べておく。

3. 分析の結果

中学校担任調査データの分析結果を図1に、高等学校担任調査データの分析結果を図2、及び図3に示した。図示した変数は、既に述べたとおり、統計的に有意な関連が見られたものに絞られている。以下では、各領域の中でも特筆すべき変数について取り上げ、解釈を付す。

(1) 中学校担任調査データの結果

「支援・能力開発」について、統計的な関連が見られたのは、「都道府県や市町村、教育センター等行政機関が作成したパンフレット等」並びに、「キャリア教育の評価」及び「職業興味検査等に関する研修」の三つであった。いずれも、読んだことがない、又は経験がない場合に、評価に悩んでいると回答した割合が多いという結果であった。特に後者の研修については、極めて合理的な結果である。また、そもそもキャリア教育の評価に関する研修を受けたことがあるのが36名(3.8%)に限られており、研修機会の充実が課題であることがうかがわれる。

「キャリア教育の計画・実施」について、統計的な関連が見られたのは、「指導案や教材の作成の工夫」、「職場体験活動などの実施」の二つであった。キャリア教育に関する指導案や教材の作成の工夫をしていない場合、及び、職場体験活動などを実施している場合に、評価に悩んでいると回答した割合が多いという結果であった。指導案や教材に工夫を施していく際に、キャリア教育の視点から見て身に付けさせたい力などが明確になるものと考えられるが、そのように明確になった学習の目標に照らすことで、評価の際にどのような点に着目すべきかも併せて明確になるものと推察される。

「利用している個人資料」について、統計的な関連が見られたのは、「ポートフォリオ」、「体験活動における意欲や態度」の二つであった。双方とも、利用していないほど評価に悩んでいると回答した割合が多いという結果であった。いずれも合理的な結果となっている。とりわけ後者について、表は割愛するが、先述の、「職場体験活動などを実施」している場合と生徒理解の資料として「体験活動における意欲や態度」を把握している場合とを掛け合わせた上で、評価に関する悩みについてクロス表を作成すると、体験活動を実施していて、かつ意欲や態度をよく利用しているほど、評価に悩む割合が少なくなるという結果が得られた。こちらも極めて合理的な結果であろう。

図1 分析結果（中学校担任調査）

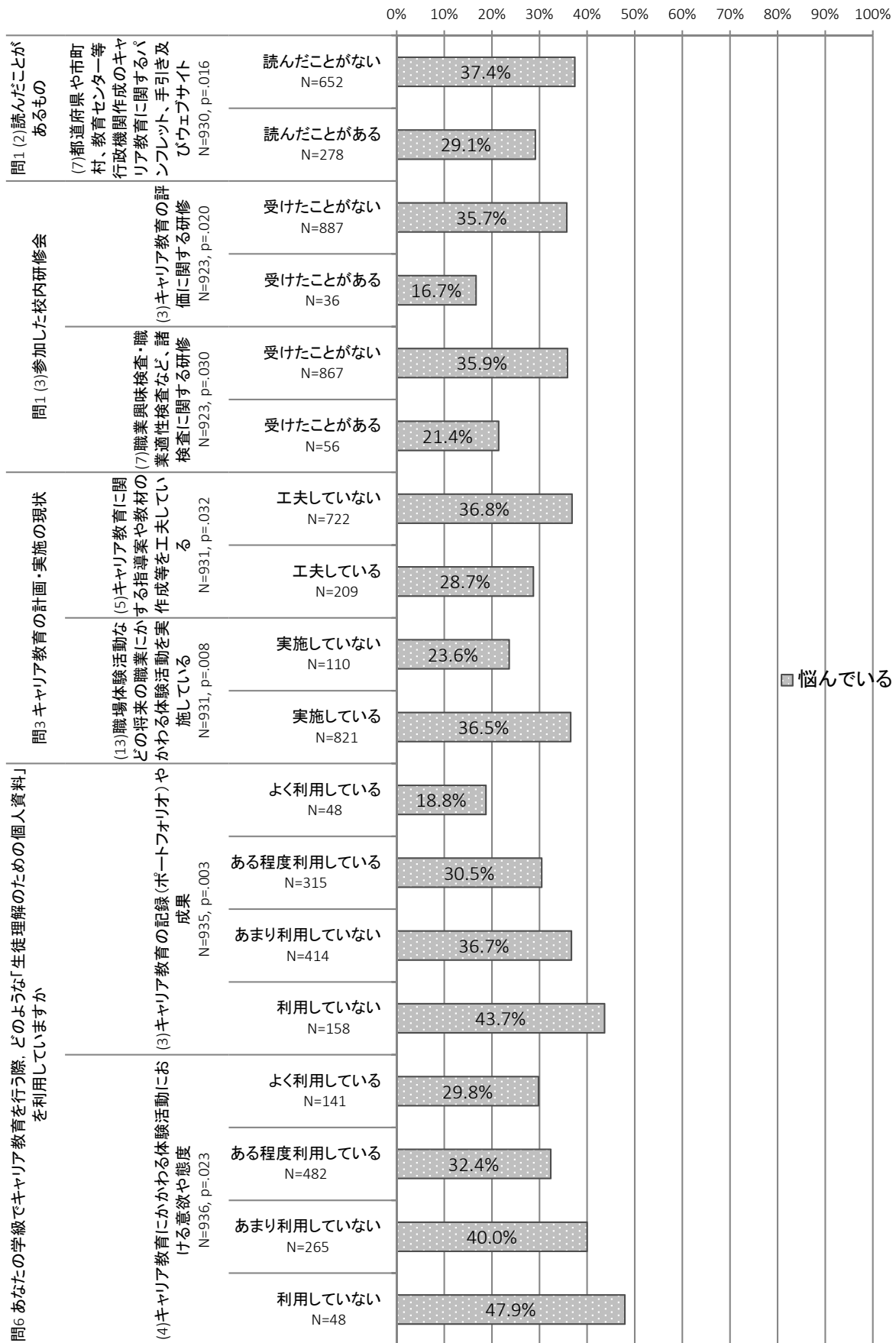


図2 分析結果（高等学校担任調査）

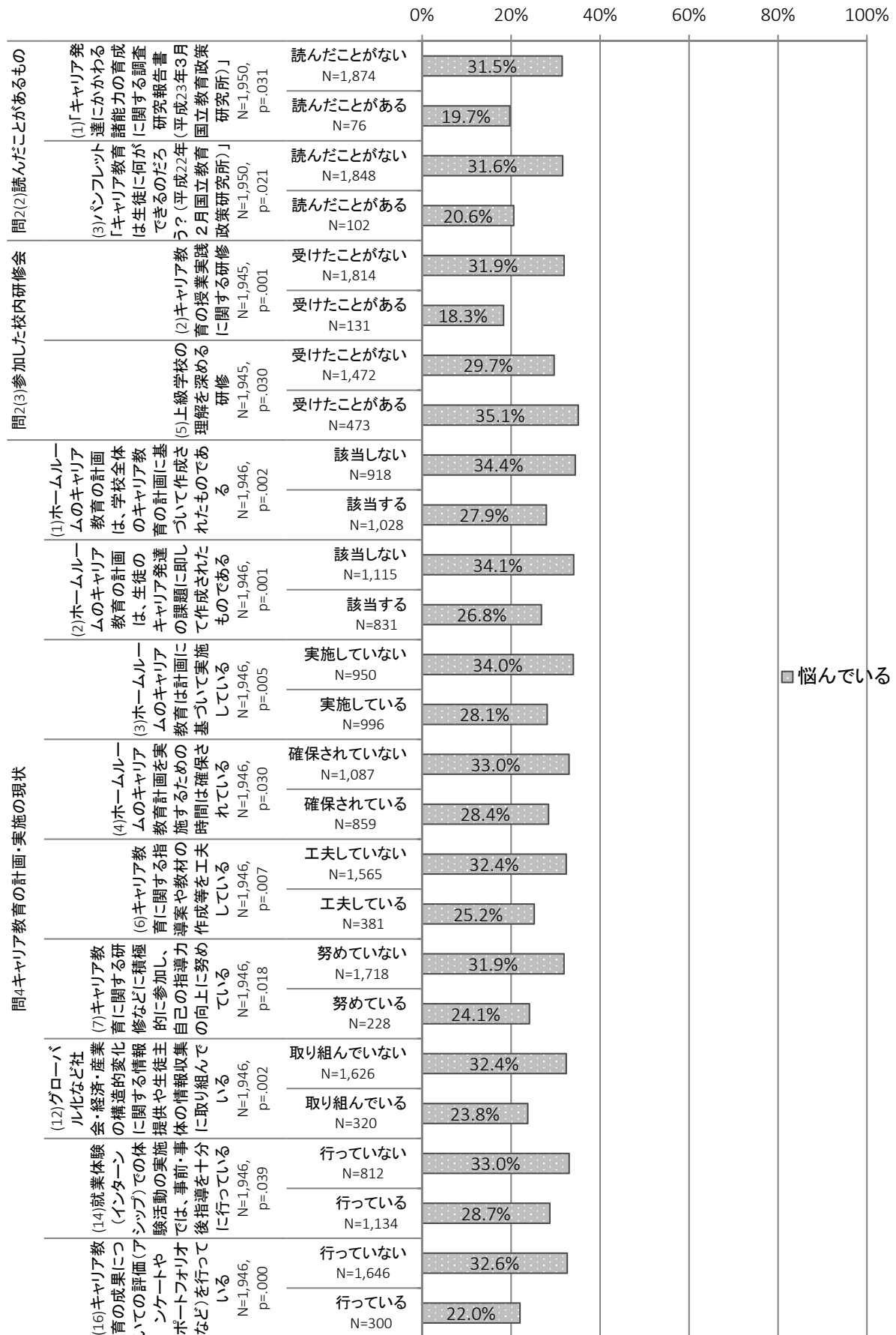
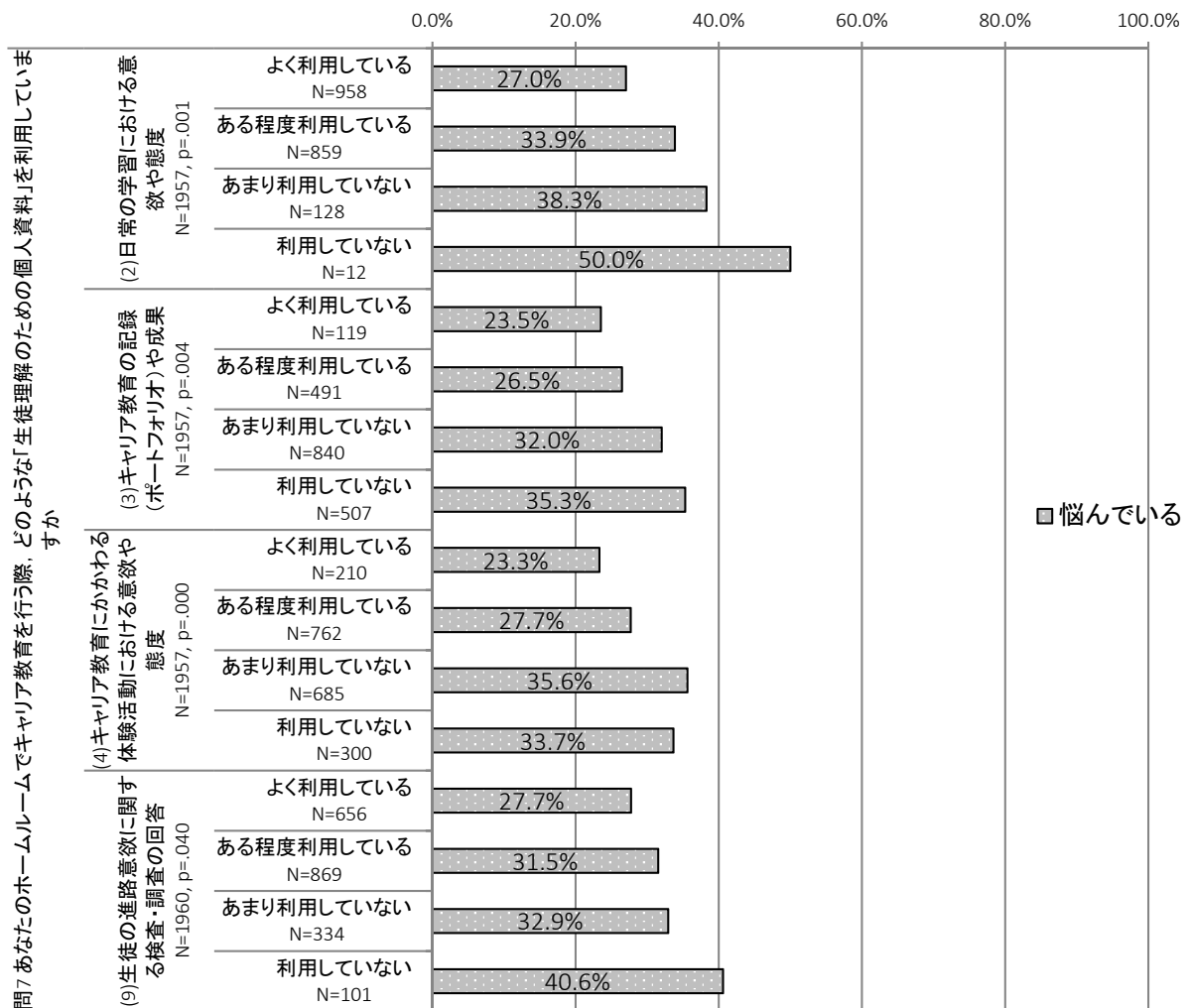


図3 分析結果（高等学校担任調査）続き



(2) 高等学校担任調査データの結果

「支援・能力開発」について、統計的な関連が見られたのは、「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」、パンフレット「キャリア教育は生徒に何ができるのだろうか？」⁷⁾、「キャリア教育の授業実践に関する研修」、「上級学校の理解を深める研修」の四つであった。「上級学校の理解を深める研修」は経験がある場合に、そのほかは読んだことがない、又は経験がない場合に、評価に悩んでいると回答した割合が多いという結果であった。パンフレット「キャリア教育は生徒に何ができるのだろうか？」においてはキャリア教育の進め方に関する解説に加えて、評価に関する情報提供もなされており、当該ページを読んだ経験があれば評価の悩みが減ることはあるものと考えられる。

「キャリア教育の計画・実施」について、統計的な関連が見られたのは、「学校全体のキャリア教育の計画に基づいたホームルームのキャリア教育の計画の有無」、「生徒のキャリア発達の課題に即して作成されたホームルームのキャリア教育の計画の有無」、「計画に基づいた実施」、「実施時間の確保」、「指導案や教材の作成等の工夫」、「自己の指導力の向上」、「社会・経済・産業の構造的変化に関する情報提供や生徒主体の情報収集」、「就業体験（インターンシップ）における事前・事後指導の十分な実施」、「キャリア教育の成果についての評価（アンケートやポートフォリオなど）の実施」の九つであった。

いずれも、該当しないと回答した場合に評価に悩んでいると回答する割合が多い結果であった。とりわけ、諸計画があることは重要なポイントである。もとより計画時に評価のことも併せて計画される、ということかもしれないが、例えば、全体計画や生徒の発達課題に即して計画が作られている場合、評価の視点としてそれらが取り入れられていく、ということであろう。評価の視点が明確になっていけば、評価の悩みも減ると考えるのは不自然なことではない。

「利用している個人資料」について、統計的な関連が見られたのは、「日常の学習における意欲や態度」、「ポートフォリオ」、「体験活動における意欲や態度」、「生徒の進路意欲に関する検査・調査の回答」の四つであった。いずれも、利用していないほど評価に悩んでいると回答した割合が多いという傾向が見られた。いずれも合理的な結果となっている。ポートフォリオや体験活動における意欲や態度は中学校とも同様の結果が得られている。

4. まとめ

本稿では、『総合的実態調査』のデータを援用して、クロス表から推測される可能性について提示してきた。『総合的実態調査』が文字どおり実態に関して情報収集することを主眼とした調査であるため、キャリア教育の評価について更に深めていくには、キャリア教育の評価を主題とした調査研究に委ねるべきであることは論を待たない⁸⁾⁹⁾。

以上の限界があることを踏まえた上で、分析結果の概要から次の2点を示しておきたい。

1 点目は、半ば自明だが、実施のための羅針盤となるようなキャリア教育の計画がない状況にあったり、キャリア教育を評価するのに必要な具体的なエビデンスがない状況にあっては、評価も難しいということである。本稿冒頭の「何を指標としてどのように効果を測ればよいのか、学校現場では戸惑いが生じている」(川崎 2008)に即して述べるなら、何を目標とした上で何をすると定まらない場合に、何を指標にして、どのように効果を測ればよいのかわからない、ということになるだろう。確かに「キャリア教育の評価は、それぞれの学校が何を目的として取り組みを行っているのかという問題と関係しており、その目的に応じた効果測定のための指標が用いられるべき」(川崎 2008)である。国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2011)の解説にもあるとおり、「取組の目的に応じた『ものさし』でなければわざわざ評価する意義が失われてしまう。言わずもがなだが、キャリア教育の実践を通じて生徒の成長について何を実現したいのか、どのように実現しようとしているのか、実現できたかをどのようにして知るのか、つまり計画、指導、評価は、相互に関連づいていなければならない。「計画において目標を明確に設定し、それに応じた実践を行い、目標の達成度を把握する評価を行うこと」(川崎 2012)が必要である。キャリア教育の目的が具体的に定められていなければ、授業をどのように行うかも定めがたく、ましてやそれをどう評価して良いのかに困るのは道理である。関連しそうな情報をやみくもに集めたとしても、評価の根拠になり得ないことも、自明のことであろう。本稿の結果は、既になされてきた指摘を改めて裏打ちするものであるけれども、幾度でも強調されてしかるべき点であることもまた述べておきたい。

2 点目は、1 点目の状況を解消するという点から考えて重要なことだが、評価に関する情報提供の在り方をどうデザインしていくかが課題だということである。3 章で紹介した結果のとおり、評価に関する研修を受けた者は少ない。したがって研修のニーズは高いと予測される一方、自明ではあるが、評価に関する研修を十分に提供することができる体制を各地で整えるのは容易ではないことも考慮に入れなければならない。国や地方自治体等が作成する評価に関する資料をもって、あるい

は他の提供の仕方を検討することも視野に入れつつ、研修の提供では対応しきれない部分を補う必要があるだろう。

本稿が扱ってきた「キャリア教育の評価に悩むのは誰か」、どのような状況に置かれている教員なのかとの問いに対しては、極端に戯画化して述べるなら、「キャリア教育を進める際の手掛かり一研修機会や諸計画等に乏しい教員」と答えることができよう。こういった教員に対して手掛かりが増えるよう支援を行うことには意義があるものと思われる。

【注】

- 1) 文部科学省ウェブサイトにて「都道府県・政令指定都市における取組事例」としてページが設置されている (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1312373.htm)。
- 2) CiNii は、論文や図書・雑誌などの学術情報に関するデータベース・サービスである (<http://ci.nii.ac.jp/>)。
- 3) ただし、検索結果には高等教育を対象とした論文等も含まれている。
- 4) ただし、実際の依頼数については不明である。抽出、実査は各都道府県・政令指定都市の教育委員会の協力を得たため、正確な依頼数は明らかではない。
- 5) 具体的な設問は次のとおり。なお、高等学校担任調査の設問文については、中学校担任調査の設問文と重複があるため、高等学校担任調査に特有の箇所だけ括弧内に示した。なお、分析で有意だった変数について、中学校担任調査データによる分析のみが有意だった場合は下線、高等学校担任調査データによる分析のみが有意だった場合は波線で示している。

<p>読んだことがあるもの</p>	<p>(1)「<u>キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書(平成 23 年 3 月国立教育政策研究所)</u>」、(2)「<u>中学校キャリア教育の手引き(平成 23 年 3 月文部科学省)</u>」、(2)「<u>高等学校キャリア教育の手引き(平成 23 年 11 月文部科学省)</u>」、(3)パンフレット「<u>キャリア教育って結局何なんだ？(平成 21 年 11 月国立教育政策研究所)</u>」、(3)パンフレット「<u>キャリア教育は生徒に何ができるのだろうか？(平成 22 年 2 月国立教育政策研究所)</u>」、(4)パンフレット「<u>キャリア教育を創る(平成 23 年 11 月国立教育政策研究所)</u>」、(5)パンフレット「<u>キャリア教育をデザインする(平成 24 年 8 月国立教育政策研究所)</u>」、(6)文部科学省・国立教育政策研究所のキャリア教育に関するウェブサイト、(7)都道府県や市町村、教育センター等行政機関作成のキャリア教育に関するパンフレット、手引き及びウェブサイト、(8)上記以外のキャリア教育に関する専門図書、雑誌論文・記事等の情報や資料</p>
<p>参加した校内研修会</p>	<p>(1)キャリア教育の概要や推進方策全般に関する研修、(2)キャリア教育の授業実践に関する研修、(3)キャリア教育の評価に関する研修、(4)キャリア・カウンセリング(進路相談)の実践に関する研修(すべての生徒を対象にした進学や就職等に関する相談)、(5)上級学校の理解を深める研修、(6)職業興味検査・職業適性検査など、諸検査に関する研修、(7)雇用・就職・就業の動向に関する研修、(8)グローバル化などの社会・経済・産業の構造的変化に関する研修、(9)上記以外のキャリア教育に関する研修</p>
<p>キャリア教育の計画・実施の現状</p>	<p>(1)学級・学年(ホームルーム)のキャリア教育の計画は、<u>学校全体のキャリア教育の計画に基づいて作成されたものである</u>、(2)学級・学年(ホームルーム)のキャリア教育の計画は、<u>生徒のキャリア発達の課題に即して作成されたものである</u>、(3)学級・学年(ホームルーム)のキャリア教育は<u>計画に基づいて実施している</u>、(4)学級(ホームルーム)のキャリア教育計画を実施するための時間は<u>確保されている</u>、(5)キャリア・カウンセリング(進路相談)を実施している、(6)キャリア教育に関する指導案や教材の作成等を工夫している、(7)キャリア教育に関する研修などに積極的に参加し、<u>自己の指導力の向上に努めている</u>、(8)卒業後の就職や進学に関する情報資料を収集・活用している、(9)進学にかかる費用や奨学金についての情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる、(10)近年の若年者の雇用・就職・就業の動向に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる、(11)就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる、(12)グローバル化などの社会・経済・産業の構造的変化に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる、(13)職場体験活動(就業体験(インターンシップ))などの将来の職業にかかわる体験活動を実施している、(14)職場体験活動(就業体験(インターンシップ))での体験活動の実施においては、<u>事前・事後指導を十分に行っている</u>、(15)社会人や保護者の講話など地域や家庭の教育力の活用に努めている、(16)キャリア教育の成果についての評価(アンケートやポートフォリオなど)を行っている</p>
<p>あなたの学級でキャリア教育を行う際、どのような「生徒理解のための個人資料」を利用していますか</p>	<p>(1)定期テストなどの日常の学習の成績、(2)日常の学習における意欲や態度、(3)キャリア教育の記録(ポートフォリオ)や成果、(4)キャリア教育にかかわる体験活動における意欲や態度、(5)生徒会活動や部活動などの諸活動への参加状況、(6)ボランティア活動など、学校外における諸活動への参加状況、(7)適性、興味などに関する検査・調査の結果、(8)進路希望調査の回答、(9)生徒の進路意欲に関する検査・調査の回答、(10)キャリア・カウンセリング(進路相談)の記録</p>

- 6) 検定統計量は、独立性の検定の場合は χ^2 値を用いた。 χ^2 値、又は正確確率を算出するに当たっては、モンテカルロ法を用いた。試行回数はいずれの分析においても10,000回である。
- 7) 質問紙上のタイトルをそのまま用いたが、国立教育政策研究所ウェブサイト上では「自分を社会に生かし、自立を目指すキャリア教育」というタイトルで配布されている。
- 8) 本稿（が用いるデータで）では扱えないが、キャリア教育の評価についての教員の悩みに関する重要なエピソードを藤田（2014: 220-221）が紹介しているので、取り上げておきたい。それは、研修会の参加者から投げかけられた、キャリア教育については大人になってからでないと成果は見えないのではないかと、在学中にそれを評価することが可能か、という悩みである。これに対して、藤田は指摘を認めつつ、「けれども、学校教育においては、それを前提としつつ、その途中の段階での評価を重ねていくことに意義があるのではないかと思います。例えば、中学校の保健体育では『生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる』ことが…（中略）…高等学校の国語のうち、現代文Aにおいても『生涯にわたって読書に親しみ、国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる』ことが求められています。このような中で、学校における評価とは、『今、君はこの点についてかなり成果が出てきているね。でも、この点についてはもう少し頑張ったほうが、これから先、もっと運動（あるいは読書）に親しめるようになると思うよ』というメッセージとして理解できるのではないのでしょうか」（傍点引用者）と答えている。この応答には、実際にできるようになったこと（≒アウトカム）だけでなく、これからできるようになること、その可能性をも視野に入れうるという立ち位置が示されている。これを敷衍していけば、キャリア教育（の評価）におけるケイパビリティの位置づけに関する議論につながると考えられるが、これは他日を期したい。なお、「キャリア教育が本質的に内包するパターンリズムの弊害を制御し得るか否か」（藤田 2014: 74）という問題にも関わるものと考えられる。
- 9) 今後の研究の展望を考える上でも、教員が置かれている状況、キャリア教育を進めていく上での悩み、今後重要になってくること、の三者がどのような関係にあるか的一端を提示することは有益と思われるため、高校に絞って行った簡単な分析結果を補足しておく。

本文においては、悩みは評価に関するもののみを取り上げたが、調査では全17項目を尋ねており、これらの相互関係をカテゴリカル因子分析を用いて検討したものが、付表1である。分析の詳細に関する解説は紙幅の関係上、省くが、「評価の仕方がわからない」との悩みは、キャリア教育の指導内容・方法やキャリア・カウンセリングの内容・方法がわからない悩み、キャリア教育と進路指導との違いがわからないとの悩み、適切な教材が得られない悩みと同一の因子にまとまる内容となっている。Factor2は「実践する際の悩み」として理解できるだろう。

このFactor2を目的変数とし、本文中で取り扱った三領域の変数を説明変数として行った重回帰分析の結果が、付表2である。5%水準で統計的に有意な変数だけに絞って示している。計画・実施の現状に関する変数と、生徒理解のための個人情報に関する変数のみが残る結果となった。興味深いのは、ホームルームのキャリア教育の計画が、学校全体のキャリア教育計画に基づいて作成されたものではない場合、先ほど示したFactor2、つまり実践する際の悩みが深まる関係となっている。日常の学習における意欲や態度、キャリア教育の記録や成果、体験活動における意欲や態度、キャリア・カウンセリングの記録といった資料を利用しないのも、「実践する際の悩み」が深まる関係となっている。指導と評価の一体化を考えるなら、これらの個人資料が利活用されない場合に「実践する際の悩み」が深まるのも自然な結果にも読める。

それでは、このような悩みを持つものは、今後何が重要になってくると考えるきらいがあるのだろうか。高等学校担任調査の間9で、「ホームルームでキャリア教育を適切に行っていく上で、現状からみて、今後どのようなことが重要になると思うか」を尋ねている。そこで、簡便ではあるが、Factor2との積率相関係数を見てみたのが、付表3である。決して係数の絶対値は大きいわけではないことに留意しつつ、統計的に有意となった変数を見てみると、「学校のキャリア教育全体計画に基づくホームルーム・学年のキャリア教育の計画の立案」や、「生徒のキャリア発達の課題に即したホームルーム・学年のキャリア教育の計画の立案」、「自己の指導力の向上」、「保護者の理解と協力」などが関連している結果となっている。「保護者の理解と協力」の変数

を除いた三つはいずれも、悩みが深まると、これらの事柄が重要であると考えられるようになるという関係性になっている。ラフスケッチにとどまる分析であったが、学校のキャリア教育計画や生徒のキャリア発達課題に即した計画がない場合に教員の悩みが深まり、悩みが深まると学校のキャリア教育計画や生徒のキャリア発達課題に即した計画を重要と考えるようになるという関連の仕方は、不自然なものではないだろう。

以上より、誤解を恐れずに述べるなら、本稿で取り上げてきた、教員が抱える「評価への悩み」は、どういった目的を設定してキャリア教育を実践していくかという計画の段階において評価を計画に盛り込めば解消されるもののようにも見受けられる。本文にて指摘した情報提供についても、飽くまで計画と関連づけた上で評価をどう実施すべきかが説かれるべきかもしれない。

付表1 カテゴリカル因子分析結果（高等学校担任データ）

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Factor5	共通性
キャリア教育に関する学年やホームルームの計画がない	.906	.210	-.011	-.078	-.045	.925
キャリア教育の全体計画がない	.730	.231	-.058	.052	-.074	.686
学校・学年の理解や協力が得られない	.630	-.266	.157	.084	.072	.531
キャリア教育に関する指導の内容・方法をどのようにしたらよいかわからない	-.001	.936	.100	-.280	.088	.786
キャリア・カウンセリング(進路相談)の内容・方法がわからない	.124	.584	-.035	.087	-.065	.447
キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない	-.052	.563	-.112	.398	.002	.546
キャリア教育と進路指導との違いがわからない	.016	.438	-.085	.125	.040	.237
キャリア教育の適切な教材が得られない	.009	.435	.198	.172	.026	.337
キャリア教育を推進する予算が確保されない	.010	-.063	.848	.000	-.155	.681
キャリア教育にかかわる学習や体験活動の計画・実施にあたって地域や企業等の協力が得られない	-.044	.098	.510	.032	.124	.314
キャリア・カウンセリング(進路相談)や進路に関する資料の保管・活用のための施設・設備(進路相談室等)がない	.259	-.115	.395	.125	.071	.393
キャリア教育を実施する十分な時間が確保できない	.122	.039	.389	-.017	.060	.218
保護者のキャリア教育に対する期待が進路先の選択やその合格可能性に偏っている	-.153	.068	.328	.007	.275	.199
評価に基づいたキャリア教育の計画や実践に関する改善がなされない	.020	.063	.018	.675	.078	.530
キャリア教育に関する研修の機会が得られない	.044	.097	.106	.357	-.041	.211
キャリア教育にかかわる学習や体験活動について、保護者の理解や協力が得られない	.128	-.077	-.045	-.033	.965	.969
生徒の進路意識や進路選択態度に望ましい変容が見られない	-.182	.190	.070	.128	.402	.221
因子寄与	2.792	2.661	2.261	1.883	1.520	
α係数	.566	.561	.385	.240	.172	

※サンプルサイズ：1,961、重みつき最小二乗法によるカテゴリカル因子分析、プロマックス回転による結果である。

付表2 重回帰分析の結果（高等学校担任データ）

従属変数: Factor2									
パラメータ	B	標準誤差	t 値	有意確率	95% 信頼区間		偏イータ2	非心度バ	観測検定
					下限	上限	乗	ラメータ	力
切片	-1.036	0.216	-4.795	0.000	-1.460	-0.612	0.012	4.795	0.998
問4キャリア教育の計画・実施の現状(ただし、この表の効果は該当しない場合の効果を示す)									
(1)ホームルームのキャリア教育の計画は、学校全体のキャリア教育の計画に基づいて作成されたものである	0.144	0.034	4.168	0.000	0.076	0.211	0.009	4.168	0.986
(2)ホームルームのキャリア教育の計画は、生徒のキャリア発達の課題に即して作成されたものである	0.091	0.034	2.634	0.009	0.023	0.158	0.004	2.634	0.749
(12)グローバル化など社会・経済・産業の構造的変化に関する情報提供や生徒主体の情報収集に取り組んでいる	0.103	0.045	2.297	0.022	0.015	0.190	0.003	2.297	0.631
(13)就業体験(インターンシップ)などの将来の職業にかかわる体験活動を実施している	-0.156	0.048	-3.221	0.001	-0.251	-0.061	0.006	3.221	0.896
(14)就業体験(インターンシップ)での体験活動の実施では、事前・事後指導を十分に行っている	0.134	0.048	2.798	0.005	0.040	0.229	0.004	2.798	0.798
問7利用している生徒理解のための個人情報(ただし、利用しない傾向が増す場合の効果を見ている)									
(2)日常の学習における意欲や態度	0.063	0.027	2.370	0.018	0.011	0.116	0.003	2.370	0.659
(3)キャリア教育の記録(ポートフォリオ)や成果	0.052	0.022	2.394	0.017	0.009	0.095	0.003	2.394	0.667
(4)キャリア教育にかかわる体験活動における意欲や態度	0.055	0.022	2.481	0.013	0.011	0.098	0.003	2.481	0.698
(10)キャリア・カウンセリング(進路相談)の記録	0.041	0.018	2.248	0.025	0.005	0.076	0.003	2.248	0.613

※Adjusted R²=.110。表中の項目は全て反転項目となっている。

付表3 付表1に示すFactor2と問9との積率相関係数(高等学校担任データ)

	(1)学校のキャリア教育全体計画に基づくホームルーム・学年のキャリア教育の計画の立案	(2)生徒のキャリア発達の課題に即したホームルーム・学年のキャリア教育の計画の立案	(3)諸計画に基づくキャリア教育の実施	(4)キャリア教育を実施するための時間の確保	(5)キャリア教育の計画の立案にあたっての生徒の参加	(6)進路学習における生徒主体の活動、運営	(7)自らの生き方にかかわるキャリア教育の充実	(8)卒業後の就職や進路に関する情報資料の収集と活用	(9)卒業後の就職や進学の指読本などの活用	(10)キャリア・カウンセリング(進路相談)の充実
r	-0.09	-0.11	-0.04	0.03	-0.02	0.01	0.03	0.02	0.04	0.03
p-value (two-sided)	0.00	0.00	0.12	0.14	0.37	0.80	0.21	0.28	0.06	0.17
N	1,961	1,960	1,958	1,957	1,958	1,957	1,959	1,961	1,959	1,960

	(11)キャリア教育に関する指導案の作成や教材の工夫	(12)キャリア教育に関する研修などへの参加による自己の指導力の向上	(13)就業体験(インターンシップ)や社会人による講話など、キャリア教育にかかわる体験的な学習の充実	(14)インターンシップや社会人による講話など、キャリア教育にかかわる体験的な学習の事前・事後指導の充実	(15)体験活動における受入事業所等の開拓	(16)社会人や保護者の講話など、地域や家庭の教育力の活用	(17)キャリア教育の計画・実施に対する保護者の理解と協力	(18)ホームルームのキャリア教育の計画・実施に対する他の教員の理解と協力	(19)キャリア教育の成果に関する評価
r	-0.02	-0.07	0.02	0.02	-0.01	0.02	0.06	0.02	-0.03
p-value (two-sided)	0.46	0.00	0.41	0.48	0.63	0.42	0.01	0.31	0.24
N	1,959	1,961	1,960	1,960	1,960	1,956	1,956	1,958	1,957

【参考文献】

内浦有美・毛受芳高, 2008, 「キャリア教育の評価－「情動の喚起」と「気づき・意欲・行動の変容」の関係性に着目した評価視点の提唱」リクルートワークス研究所『Works review』3: 196-209.

川崎友嗣, 2008, 「キャリア教育の効果と意義に関する研究－中学校における効果測定を試み」『CHAT Technical Reports』7: 43-52.

川崎友嗣, 2012, 「PDCA サイクルに基づくキャリア教育の展開－評価について考える」『進路指導』85(1): 3-12.

国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2010, 『「自分を社会に生かし、自立を目指すキャリア教育」－高等学校におけるキャリア教育推進のために』.

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター, 2011, 『学校の特色を生かして実践するキャリア教育－小・中・高等学校における基礎的・汎用的能力の育成のために』.

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター, 2013, 『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書』.

藤田晃之, 2014, 『キャリア教育基礎論－正しい理解と実践のために』実業之日本社.

文部科学省, 2011a, 『中学校キャリア教育の手引き』.

文部科学省, 2011b, 『高等学校キャリア教育の手引き』.

【謝辞】

匿名の査読者二名より、大変貴重な指摘を頂きました。ある査読者からは、とりわけ丁寧に読んで上でのコメントを頂戴しました。ここに記して謝意を表します。もちろん、本稿に誤りが見つかった場合には、筆者の責任であることを申し添えます。

(受理日：平成27年3月31日)